骨から見た乃木号

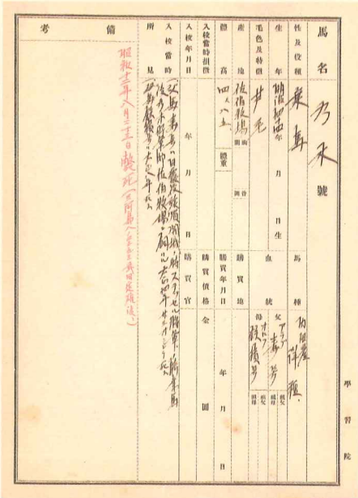
乃木号は、日露戦争における旅順開城の際、ロシアのステッセル将軍から乃木大将に贈られたアラブ（Arab）種の寿号を父にもち、母馬はオルロフ（Orlov）種の鉄嶺号とする牡馬である。体高（足元から首もとの鬣甲までの垂直高）は145cmと大型であり、母馬の故郷であるロシア南部近くに分布している、当時、軍馬として注目されていた中国西北地区の伊犁馬やハイラール（Hailar）馬といった馬種の体高と近い。がっしりとした体格は、120～130cmほどの日本在来馬と比べると、ふた回りほど大きな印象をもつ。

切歯の咬耗度合からみると、20歳をゆうに超えていることがわかるように、27歳で天寿をまっとうするまで、乗用馬として人々に愛され続けた。現存する当時の写真では白毛にみえるが、馬籍簿には芦毛と登録されており、白毛は、加齢によるものであろう。

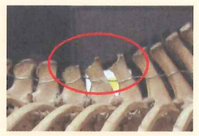
長年馬術練習に用いられていたことから、下顎の第二前臼歯（P2）が、馬銜によって著しく摩滅している。臼歯が植立しているため参考値ではあるが、P2の歯冠高は、右が3.3mm、左が3.11mmとなる。また、長年多くの人を乗せたからであろうか、乗馬のために鞍が載せられる部分の第13～15胸椎をみると、椎骨棘突起上部が欠損している。負荷がかかり、脆くなった部分が風化してしまったことなどが原因だと考えられる。

下顎骨の全長は445.01mm、上顎全臼歯列長は160.61mm、下顎全臼歯列長は158.55mmであり、骨格標本が組み立てられていたため、一部は参考値となるが、主要四肢骨の計測値は表1に示した。関節部分などの観察からは特に骨病変などの痕跡は確認できず、晩年まで愛され続け、丁寧に世話がされていたであろうことが窺える。

（国際研究教育機構客員研究員　菊地大樹）



乃木号馬籍簿



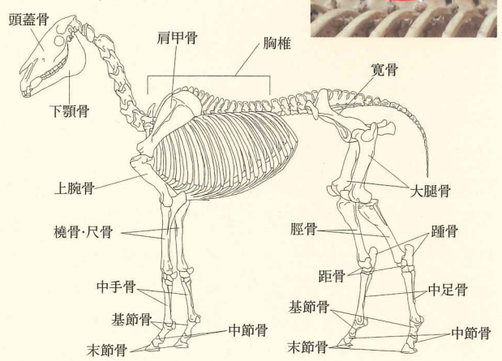


図１　馬骨格図譜

表１　乃木号計測値

計測部位	計測点	計測値
	1	445.01
	3	133.26
	6	160.31
	7	79.53
	8	80.94
下顎骨	15	106.89
	19	244.35
	20	215.17
	22a	102.42
	22b	70.52
	22c	54.39
上顎臼歯列長	P2-M3	160.61
下顎臼歯列長	P2-M3	158.55

計測部位	計測点 GL	GLI	Bp	Bd	SD
上腕骨		308.59	98.91	87.09	41.38
橈骨	(346.07)		91.73	82.99	43.56
中手骨	(249.66)		58.15	56.76	34.17
寛骨	393.81				
大腿骨	429.01		124.16	101.08	46.81
脛骨	(380.08)		105.09	81.48	45.29
中足骨	(295.96)		57.59	55.83	34.33

※（　　）は参考値

計測部位	計測点 HS	DHA	SLC	GLP
肩甲骨	397.69	375.43	67.58	109.57

※計測はDriesh（1976）に準じ、計測部位はすべて右、計測値の単位はmm。

学習院の打毬

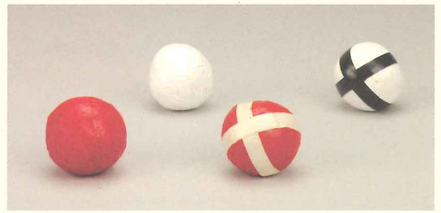
学習院打毬は明治18年（1885）に皇居吹上御所において、学習院学生による天覧打毬試合が行なわれたことが、その始まりである。その後、同45年（1912）から、学習院目白校地にて打毬競技会が開催されるようになる。

大正14年（1925）には明治神宮競技大会、翌15年には東北帝国大学主催馬術大会にて打毬試合が行われ、さらに昭和17年（1942）には「満洲国建国十周年記念馬術大会」に参加するため、学習院打毬は海を渡った。近代打毬は宮内省主馬寮を除けば、学習院が先駆者であり、率先して打毬の競技者を指導し、その発展に努めた。

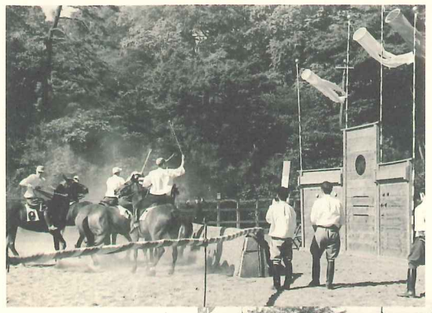
新制学習院になってからも、昭和の終わり頃までは、学習院目白キャンパス内の馬場にて打毬大会が開催されていた。

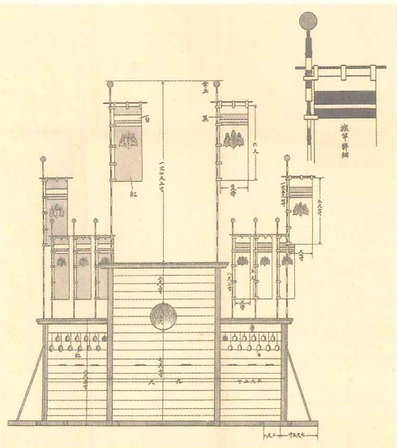
（学芸員　長佐古美奈子）

打毬・毬杖


打毬・平毬（左）・揚毬（右）

馬術及厩舎・打毬　『大礼奉献学習院写真』大正４年


打毬の様子　昭和期
（学習院アーカイブズ蔵）


打毬・毬門『打毬ノ由来』宮内省主馬寮　昭和９年より

打毬のルール

赤・白に分かれた各組５名の騎乗者が、毬杖を用いて、地上に撒かれたそれぞれの色の毬（平毬）をすくい、毬門に投げ入れる。赤の毬が入ると太鼓が、白の毬が入ると鐘が打ち鳴らされる。どちらかの組が11個の毬を入れると揚毬が投入され、この揚毬を先に毬門に入れた組が勝つ。